

## 日本銀行は預金部をどう観ていたのか：1942年

佐藤政則（麗澤大学）

総力戦となった太平洋戦争期において戦時金融財政のガバナンスは、どうなっていたのか。この関心から本報告では、民間金融組織を統括した全国金融統制会の会長行である日本銀行と、政府金融組織の中核体であった預金部との関係を考察したい。具体的には、金融協議会が改組され全国金融統制会が設立される1942年において統制会会長行（日銀）は預金部をどう観ていたのかを検討する。

日本銀行史研究を開拓した吉野俊彦（1952）は、1930年代後半の預金部による短期資金運用を「中央銀行が二個存在するかの如き外観」（p.401）と厳しく批判した。預金部研究の牽引者の一人である迎由理男（伊牟田敏充編（1991）所収）は、吉野の見解を踏まえ、これを1940年代初頭まで拡充し「金融調整（統制）主体の二元化」（p.306）ととらえ、郵便貯金の急増を背景に戦時期の預金部が金融財政全般で存在感を増したと論じた。

しかし1930年代後半の吉野の見解を40年代初頭まで拡張する迎の議論は、いささか強引であろう。1932年11月から大蔵省の外局となり専任の預金部長が任命されていた預金部は（1925年4月に預金部は新設されたが部長は理財局長兼務）、37年5月から預金部資金局と改称され、長期・短期の資金運用を強化した。しかし41年7月には再度預金部に改称された。預金部史における1930年代後半は、特異な時期と言えるのではないか。

素直に観れば、日本の戦時金融財政における二元的世界の究明がより重要なのではないだろうか。すなわち、国債消化と軍需産業金融を担うべく全国金融統制会に組織された銀行等の民間金融組織と、それとは別個に存在した郵便貯金等・預金部とがどういう位置関係にあったのかを考察することである。より根本的には、二元的であることが日本の預貯金市場の構造に適合的だったのか、それとも平時の仕組みの延長線で総力戦を戦ってしまった日本の戦時体制の問題なのか、であろう。

戦時金融統制が極度に強化される1942年において日本銀行は、預金部をどう観ていたのか。太平洋戦争期における日銀の中核的政策立案組織であった企画委員会において一万田尚登審査局長が言った「余り銀行の数が少なくても独占的になって預金部のようになるから面白くない」（1942年11月19日）という、この「面白くない」の内実を探る。

### 参考文献・資料

伊牟田敏充編（1991）『戦時体制下の金融構造』日本評論社

大蔵省大臣官房調査企画課編（1978）『聞書戦時財政金融史』大蔵財務協会

佐藤政則（2021）「戦時銀行統合と地域公益」『金融経済研究』第43号

日本銀行審査部（1942）「企画委員会第2回特別委員会関係書類」（日本銀行アーカイブ資料3848）

吉野俊彦（1952）『我国金融制度の研究』実業の日本社